

ピーマン (トンネル早熟栽培)

ナス科：メキシコ南部非高地

栽培暦

月 旬	1			2			3			4			5			6			7			8			9			10			11			12		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
主 な 作 業	<p>播種 (電熱育苗)</p> <p>移植 (鉢上げ)</p> <p>定植準備</p> <p>うね立て</p> <p>トンネル除去</p> <p>支柱除去</p> <p>整枝・始め</p> <p>収穫</p> <p>マルチ</p> <p>敷きわら</p> <p>収穫後始末</p> <p>育苗管理</p> <p>病害虫防除</p> <p>整枝誘引</p>																																			

■栽培のポイント

1. 風等による倒伏を防止するため、必ず支柱を立て誘引する。
2. 整枝は、第1分枝以下のわき芽を早めに除去し、主枝4本仕立てとする。
3. 乾燥すると尻ぐされ果が発生しやすいため、適宜かん水を行う。

■品種 京波、京ゆたか、京ひかり。種子量はa当り6mℓ。

■育苗

播種 128穴セルトレーに育苗用の培養土を詰め、播種前に培養土が均一に湿るよう十分にかん水してから播種し、セル間の仕切面がみえる程度に覆土し、発芽までは濡れ新聞やポリマルチ等で覆い乾燥を防ぐ。発芽までの地温は30℃とし、発芽したら覆いを除去する。発芽後は地温20℃で管理する。

移植 本葉1.5~2枚時に、10.5~12cmポリ鉢に移植する。活着後~定植までの温度管理は日中25℃、夜間15~17℃とする。

鉢ずらし 生育が進むにつれて、鉢間が狭くなると苗が軟弱徒長しやすくなるため、鉢ズラシを行い、花芽形成を良好にする。育苗日数は75日前後。

■定植準備 本畑pHは6.0~6.5に調整し、完熟堆肥を施用して耕起する。

マルチ張り 定植1週間前に行い、地温を確保する。

■うね幅・株間 うね幅150cm、株間45cmの1条植え(148株/a)とする。

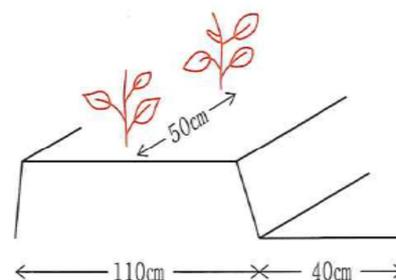
■定植 定植適期苗は1番花が開花始めの頃であり、生育の揃った苗を定植する。定植時に生育を栄養生長型にするため、1番花は早めに摘花するとその後の生育・収量に好影響をもたらす。定植後、トンネルを行い、夜間にはこも等をかけ保温する。

施肥例

(a 当り)

うねつくり

肥料名	基肥	追肥	備考
完熟堆肥	400kg	—kg	成分量
苦土重焼燐	4	—	窒素 3.3kg
苦土石灰	12	—	燐酸 3.3
CDU-S682 (16-8-12)	9	—	加里 2.8
燐硝安加里 S604	—	12	



■定植後の管理

トンネル換気 日中はトンネル内が 30℃以上にならないように換気する。トンネルは 5 月下旬の温暖な日を選び除去する。

整枝・誘引 トンネル除去後、苗が倒れないように仮支柱を立て、第 1 分枝以下のわき芽は早めに除去し、主枝 4 本仕立てとする。生育が進むにつれて、枝の先端が垂れ下がるので、高さ約 60 cm に針金等を設置して枝を誘引する。さらに生育が進み、枝が下垂する場合は、その上 30 cm にも針金等を張り下垂を防止する。誘引作業は、枝張りの角度が 45° になるようにする。枝が繁茂したら、内側から発生する強い徒長枝（ふところ枝）を間引きせん定し、内側に光が入るようにする。

かん水・敷きわら 6 月下旬になると気温が上昇し、地温は日中 30℃以上にもなるので敷きわらを行い、地温上昇と乾燥防止に努める。

■病虫害防除 疫病（地際部が水浸状に軟化して萎ちよう枯死）対策として、ほ場の過湿を防ぐ。ピーマン等のナス科の連作では、土壌伝搬性の青枯病等が発生するため、栽培ほ場は輪作を行う。アブラムシは、発生初期に防除を行う。

■収穫 6 月上旬～10 月中旬まで長期間収穫できる。1 果重 35 g を目標に収穫する。収穫に要する日数は温度や草勢、着果量によって異なるが、最盛期は開花後 25～30 日である。着果量が多く、草勢が弱い場合はやや小果（若どり）とし、着果量が少なく草勢が強い場合は大果（あとどり）とし、草勢を維持する。目標収量は a 当り 700 kg。